

カンボジアのトゥクトゥク

カンボジアでは乗合バスや流しのタクシーがないので、市内のちょっとした移動にはトゥクトゥクを利用した。バイクに台車がついて、ちょっとした引越しにも使われる。乗る前にドライバーとの値段交渉が必要だ。道路舗装が不十分なのでガタガタと揺れ、スピードもそれほどは出ない。陽が差し込み、埃っぽく、雨がひどく降ればカーテンを閉めてくれるが、乗り心地はそれほど良くはない。

バタンバン市内の自宅から仕事先まで片道 10 分かけてトゥクトゥクで通った。任期後半、往復ともこの人と決めたドライバーは、控えめで正直で、時間をきちんと守った。英語で会話ができるので、家族のことや軍隊生活をした若い頃の話の聞くこともあった。いつも擦り切れた洋服を着て、ひびの入ったヘルメットを



被り、時々トゥクトゥクが故障して苦労していた。帰国の際に蚊帳や日用品を譲り、自転車(日本製の中古)は安く引き取ってもらった。後で「通学する娘が良い自転車と喜んでいる。毎日トゥクトゥクを使ってくれたおかげで子どもたちを学校へ通わせることができ、家族も私も感謝している」と携帯電話にメッセージをもらった。(川畑享子)

“アールディーアイ通信 No. 68/2013”から

写真:同僚の通勤風景 バタンバン カンボジア 2013年

ジュリアス・ニエレレ

アフリカに関わったことのある方ならご存知の人も多いだろう。タンザニアの初代大統領の名前である。マリム・ニエレレと呼ばれ今でもタンザニア人の心の師である。マリムはスワヒリ語で先生、大統領というより人生の先生なのだろう。

ビクトリア湖近くへ出張に出かけた時、ニエレレが生まれた家と記念館を訪ねる機会があった。全土を7つに分けた灌漑ゾーンのこの地区の職員がわざわざ案内してくれた。思いがけない観光旅行でニエレレが身近になった気がした。ウジャマー政策などでアフリカならではの平等社会を目指したが、市場経済の荒波には理想は実現できなかった。ニエレレは大統領を辞してから一農民として余生を生きた。たまたま飛行機に乗り合わせた赴任途中の駐タンザニア日本大使に「あなたは元タンザニア大統領のニエレレさん

ですね」と尋ねられ、「ただの農夫です」と答えた逸話(栗田和明・根本利通『タンザニアを知るための60章』明石書店)がニエレレそのもので、そこにタンザニア人の心根があると信じたいのは私だけだろうか。(佐藤勝正)

“アールディーアイ通信 No. 67/2013”から

写真:ニエレレ記念館の前で タンザニア 2013年



エチオピアでジャバナコーヒー

エチオピアの広い地域で、客をもてなしたり、ひと休みするときの飲み物は主にコーヒーである。アダマという落ち着いた感じの地方都市へ数日間出張した折り、道脇の野天のコーヒー屋でエチオピアコーヒーを楽しんだ。女の人がおそらく毎日同じ場所に、コーヒー豆、茶器、水、炭から小卓、椅子まで運んできて店開きをする。終日営業しているようで、コーヒーで一息入れて寛ぐ場所になっている。茶道具台の上で乳香が焚かれる。コーヒーマスターは女性である。男性はコーヒーを淹れないものらしい。生豆を煎って、木臼に入れ棒で砕き、粗挽きの粉をジャバナと呼ばれるポットに入れ、炭で沸かした湯を入れ抽出する。3口ほどで飲み干せるくらいの小さな湯飲み茶碗ギリギリにコーヒーを注ぐので、受け皿に溢れることがよくあ



る。一杯 15 円くらいで、飲み方はブラックと砂糖入りがあるが、一番美味しかったのは「ティナダム」という薬草の葉っぱを浮かべたコーヒーである。軽い爽快感のある香りでコーヒーがまろやかになり、飲み終えて葉っぱを食べると口の中がさっぱりとして、その後味の良さが忘れられない。(濱中 透)

“アールディーアイ通信 No. 66/2013”から

写真:オロミア州アダマ エチオピア 2013 年

ニカラグアの地方の祭りキンプランカ

プエルトカベサス市周辺に住む先住民ミスキート族が、それぞれの村の生活を、伝統的な踊りとセリフのない寸劇で披露するキンプランカという祭りがある。市主催で毎年開催され、代表の 10 グループが参加する。キンプランカはミスキート語で「王様の遊び」という意味で、王様に捧げる踊りといわれる。漁業、狩猟、林業など村の特徴となっている生業と生活習慣をストーリーに仕立て、産物に対する感謝を歌と踊りで表現する。1グループは 30 人前後で、演技者とギターや太鼓、木管の演奏者、そしてミスキート語で歌を唄う男女からなる。狩猟の村の場合、獲物に矢を放つところから、捕獲して料理するまでを劇にする。劇中に犬や亀、ワニやペリカンなども登場する。衣装が独特で、葉っぱや動物の皮を身に着けたり、木の皮をなめして作る民族衣装も使われる。



昼頃に始まり、車の照明で夜まで続く。会場周辺には屋台が並び、見物客も演技者も酒がかなり入り、やがて熱狂する。いかに観衆を盛り上げたかで、優勝の行方が決まる。翌朝職場ではその話題で盛り上がる。(高橋 貞雄)

“アールディーアイ通信 No. 65/2013”から

写真:この犬はおとなしく演じていた。

プエルトカベサス ニカラグア 2012 年

エチオピアで見た食べた精進料理

エチオピアはイタリアに占領された時期もあったが、アフリカ諸国の中では植民地化されずに独立を守り続けた数少ない国で、3000年以上続く伝統、慣習、文化が色濃く残っている。アフリカのほとんどの国にはヨーロッパからキリスト教が伝わったが、エチオピアにはエジプトのキリスト教であるコプト教が直接伝わり、独自のキリスト教としてエチオピア正教を築いてきた。現在国民の半数以上がエチオピア正教徒といわれている。

エチオピア正教では毎週水曜日と金曜日、そして特別なセレモニーの前は動物性たんぱく質の食べ物を禁止としている。街中の大衆レストランにはそうした日に教徒が食べる精進料理がある。同僚が注文した料理は大きく広げられた“インジェラ”の中央に汁気のない煮込みシチューの“ワット”、そのまわりには



数種類のおかずが盛り付けられていた。インジェラは、テフという穀物の粉を水と練って発酵させ、クレープのように焼いた主食で、普及率は日本での米よりも高い。鉄分が豊富だが酸味があり、日本人には好み完全に二分する独特な味である。インジェラは手でちぎり、具をほどよく包んで口に入れる。エチオピア正教の生活規律を守り、日曜日の教会での礼拝を欠かさない信者が多いそうだ。(濱中透)

“アールディーアイ通信 No. 64/2013”から

写真: 伝統的な精進料理 ナザレ エチオピア 2013年

エクアドルのお正月

世界各地には年越しに様々な慣習やしきたりがあるが、エクアドルの首都キトで見た“大みそか(año viejo)”とよばれる慣習を紹介する。12月31日、新年が明ける5分くらい前になると、着古したパジャマや洋服に新聞紙を詰めて男性に見立てた人形に、家の前で火をつける。燃やしながらかウントダウンが始まり、裕福な家では庭先から花火を打ち上げる。燃やす人形は古いものの象徴とされ、焼いて消すことにより古い年が終わり、引き摺ることなく新年を迎えるという。人形は家庭やグループによって作られ、品評会もある。男の人形以外に有名人やアニメキャラクターなどの人形も作られ、出品される。燃やした後はひと晩中、大音量の音楽をかけ、踊り、賑やかになる。街頭では、燃やされる男性の未亡人に扮して、女装した人が通りかかる車の前で踊り、「夫が死んでしまうのでお金をください」といった感じでお金を求める。



た人が通りかかる車の前で踊り、「夫が死んでしまうのでお金をください」といった感じでお金を求める。

日本では除夜の鐘を聞きながらその年にあったことを思い浮かべ、良い年が迎えられようと願う。エクアドルでは、過ぎ去ったこととはきれいさっぱりと決別し、新たな年の新たな希望と期待を抱くように感じられた。(リエラ麻子)

“アールディーアイ通信 No63/2013”から

写真:花火をカメラで追う。玄関前では人形が燃やされている。 キト エクアドル 2013年